

583
4



世國竹苑芬之四

三宅天竹

Faint vertical text columns within a blue border, including characters like 竹苑, 天竹, and 芬之.

Red seal impression in the top left corner.



柱園竹譜卷之四

龜文竹

龜文竹ハ人面竹の類なり世ニ稀なり其の竹を西土ニ

てハ崇陽縣寶陀岩秘傳ニ生じて僅ニ一本のよし花鏡ハ

傳ふまゝとて往時琉球ニ産せしことありとも亦ゆづら

しその竹高さ一丈餘節間舞促ハして節ニ龜甲紋とな

る琉球産物志ハいへる國産ハまた之の事とさす

琉球産物志云龜紋竹高丈餘節間舞促ハ作龜甲紋蓋奇

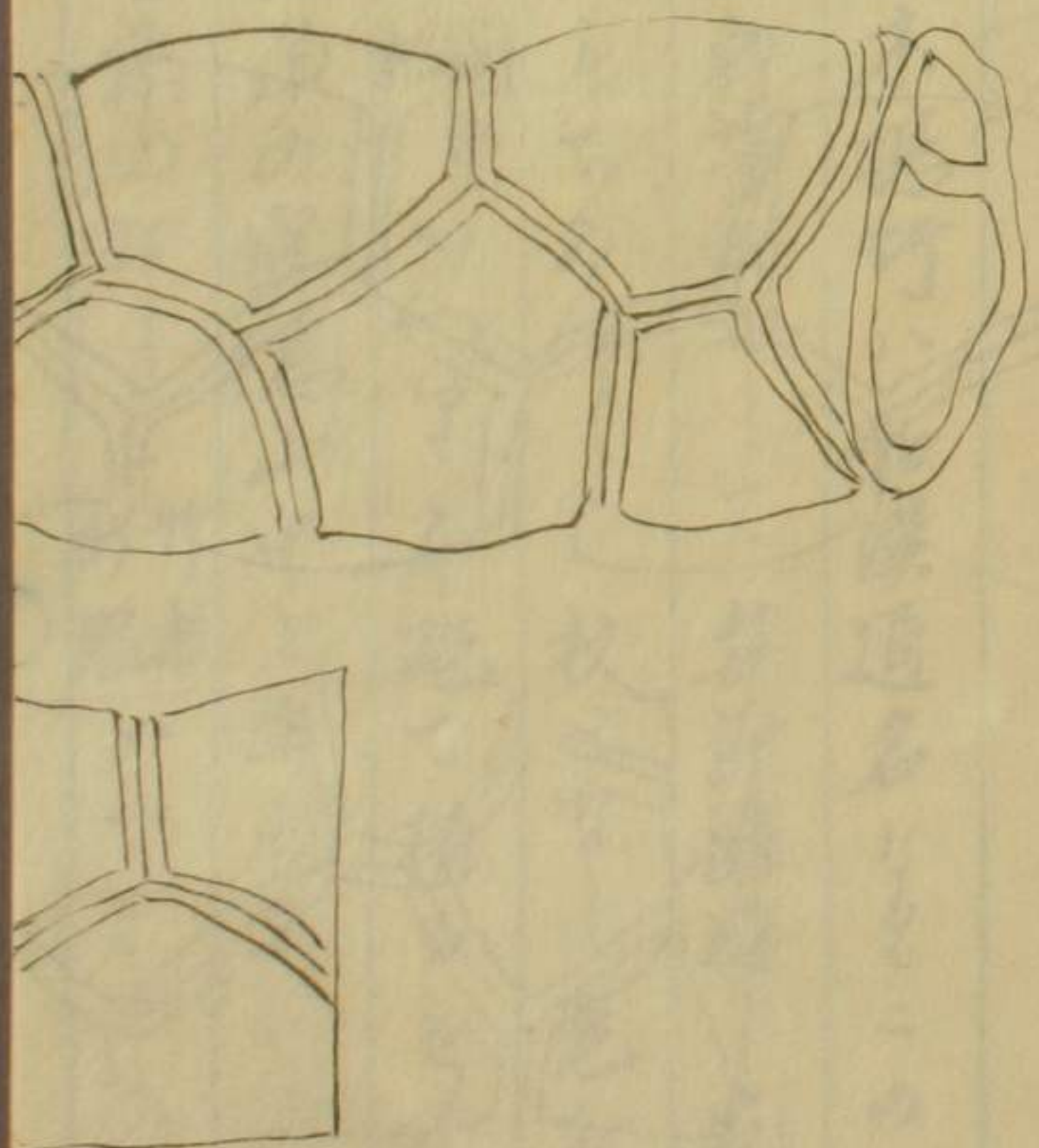
品也懇望不易得

農政全書云龜文竹産崇陽縣寶陀岩製扇甚奇

滑幢小品云崇陽縣有龜紋竹惟空陀岩產之竹僅一本製
 扇甚奇聞今亦絕種矣
 秘傳花鏡云龜文竹產於空陀岩昔年僅一本以之製扇甚
 奇今不可得矣

龜文竹

丹州岡竹所載龜紋竹之圖



釋名

龜文竹

農政全書、湧燈小員
和傳花鏡

文字ありのハ紋子作る

鶴膝竹 鼓越竹

鶴膝竹一名鼓越竹一名木樨竹ハ和漢通名なりこの種

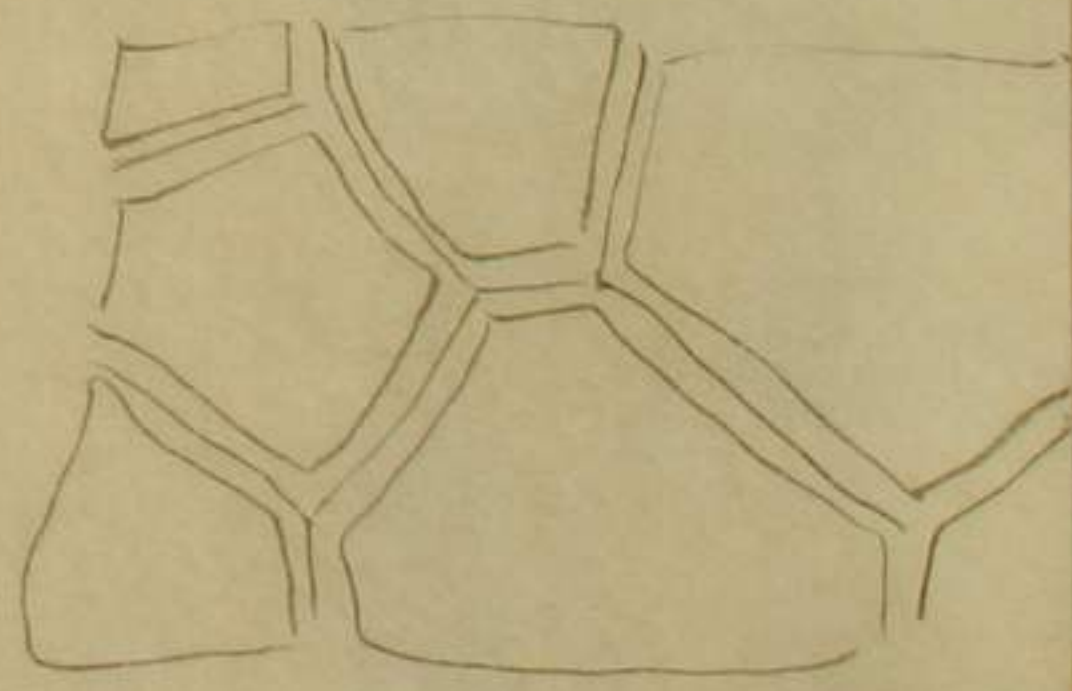
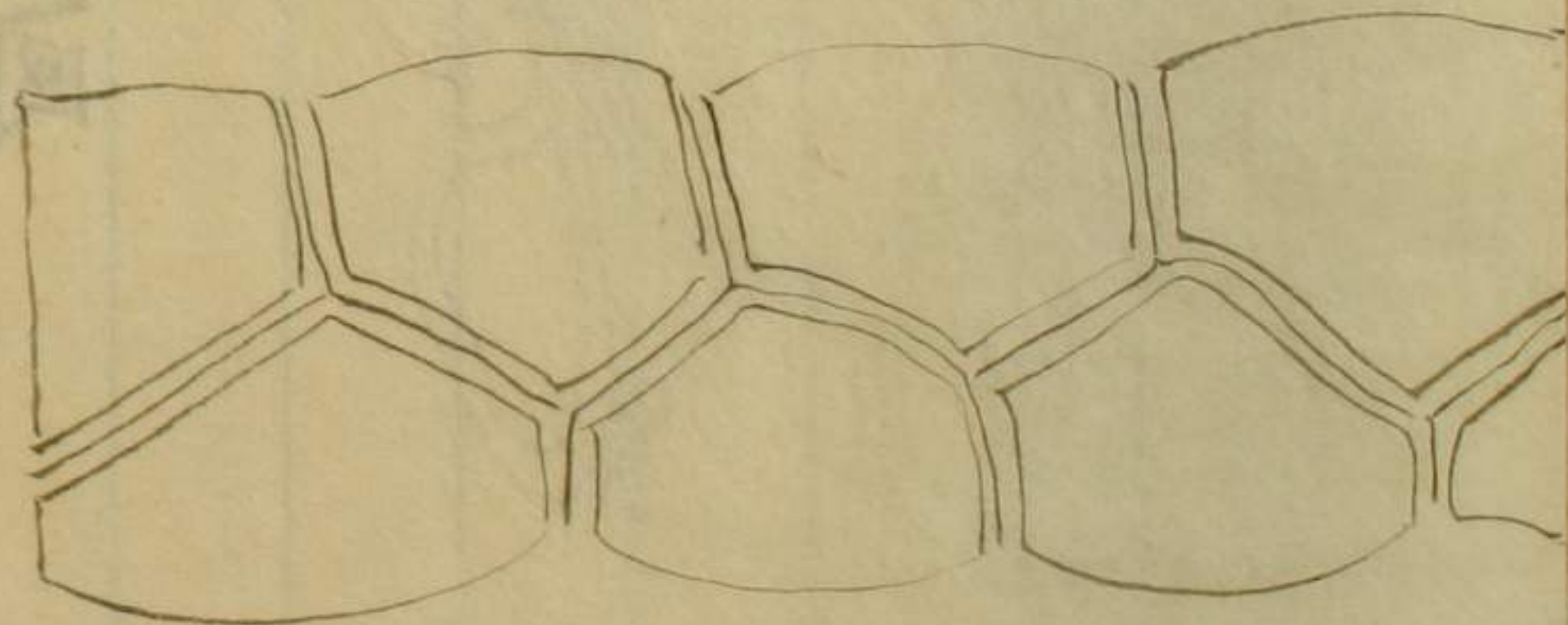
岡崎小産ものハ莖幹管前ハ一ノ節擁腫一宛も

鶴膝の如シ竹譜沿前と云ふは竹ノ節ニ有リ老ニ扶

すハ靈寿杖ノ似たりと云関中ソツテ今絶て植るものな

し最ハ一ノ節ハ一種杭笏の靈隱山中ニ生とりとのハ

節密にして内実ハ天壇藤の如シ竹譜いづレこの種



考之如西事七卷之

竹譜詳錄云鶴膝竹又名木槌竹生杭州西湖靈隱山中節
密而肉美略如天壇藤間有突起如鶴膝人亦取為柱杖生
于園囿者俗名鼓追竹節為擁腫而莖管削宛如鶴膝筍可
食葉世程園中記云鶴膝竹出吉田縣似靈壽杖不須治削
人多取以扶老

八閩通志云鶴膝竹莖瘦節大可為杖筍味甚美

本草彙言云鶴膝竹節下大小似鶴膝閩人又呼為追竹

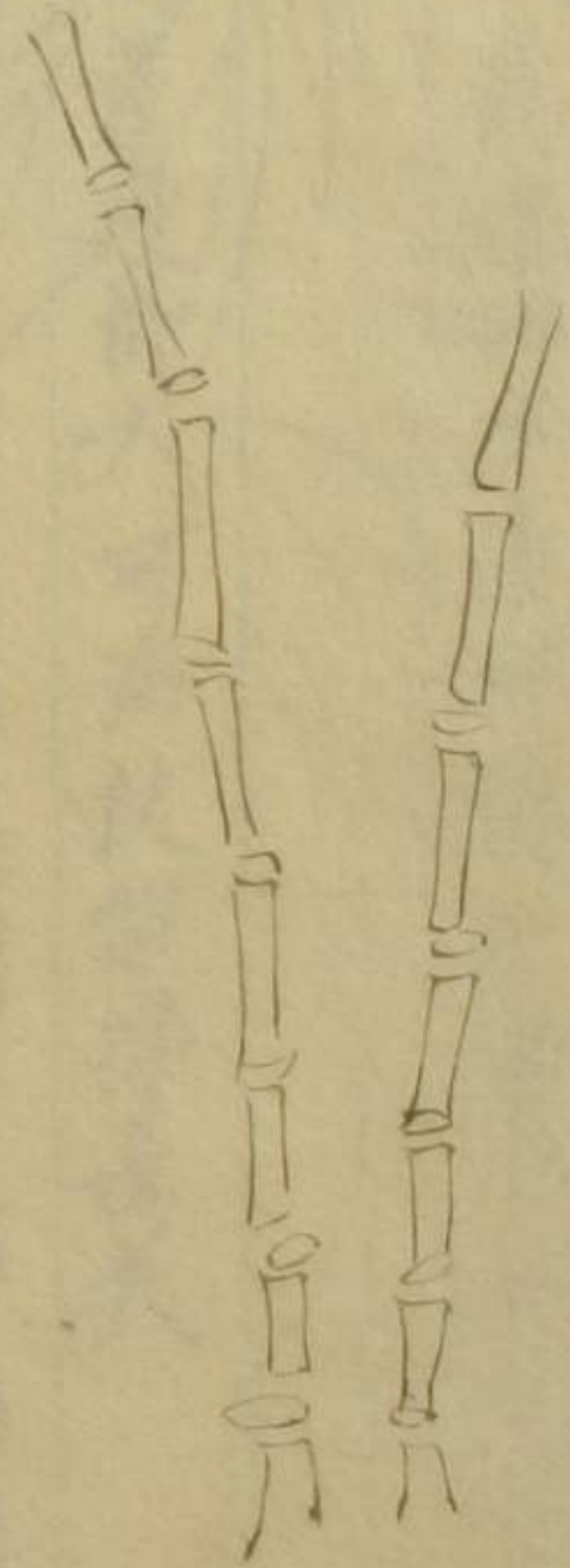
高要縣志云鶴膝竹節高鶴膝亦軒墀之玩

廣群芳譜云鶴膝竹狀節下大上小似苦竹園中士人呼為

東穀竹譜亦載鶴膝竹之圖



竹譜詳錄所載鶴膝竹之圖



趙竹堪作拄杖案此即雲南志所謂雞腿竹蓋即竹類也
 泉州府志云趙竹肉厚而竅小

釋名

鶴膝竹 竹譜詳錄
圖中記

鶴膝ハその節擁腫して頗る鶴膝に似たりといふ

鼓趙竹 竹譜詳錄

此竹鼓趙に似たり故に名づく

木楄竹 全上

木楄ハ無患子なり鼓趙に似る木楄といふハ其の
 其節の擁腫せし状といふ

高節竹

高節竹一名節竹一名暴節竹ハ俗名とこふたけといふ
近來舶來なりといつて六七十年前より舶
來ありと松平攝磨守園中ニ植らるる僅に三四年
と経て二間四方程とも繁茂せし今ハ絶てなりさ
れ多し多紀家ニ傳來せし一柘竹あり毎年医学館藥品
會の具品より其竹と親見せり今全形赤色にして中
黒三とむかひ徑三四分とありて長三尺許其うち五寸
程とハたゞ六節あり節の状頗る算珠子に似て殊に
扁大なりとありて三寸許ありといつても其めりといふ

薄くともいふ。所ハかゝりありふこれハ杖をいふ
るより其よりとむかひ削り去りしものありし一種
高節竹ありまた銀鏡竹と名づく其色金の如し竹譜詳
録即同名異物なり此種まゝの舶來たるをいふ
丹州國竹云暴節竹俗ニコフタケト云扶老竹一名節竹
ト云モノ是也舶來ノモノ多紀氏ノ家藏ニアリ
山海經云龜山多扶竹

郭璞注云印竹也高節實中中杖也名之扶老竹
漢書云張審之大復見節杖問之云實人市之身毒國
竹譜云竹之堪杖莫高於節礫所不凡状若人功豈必蜀壤

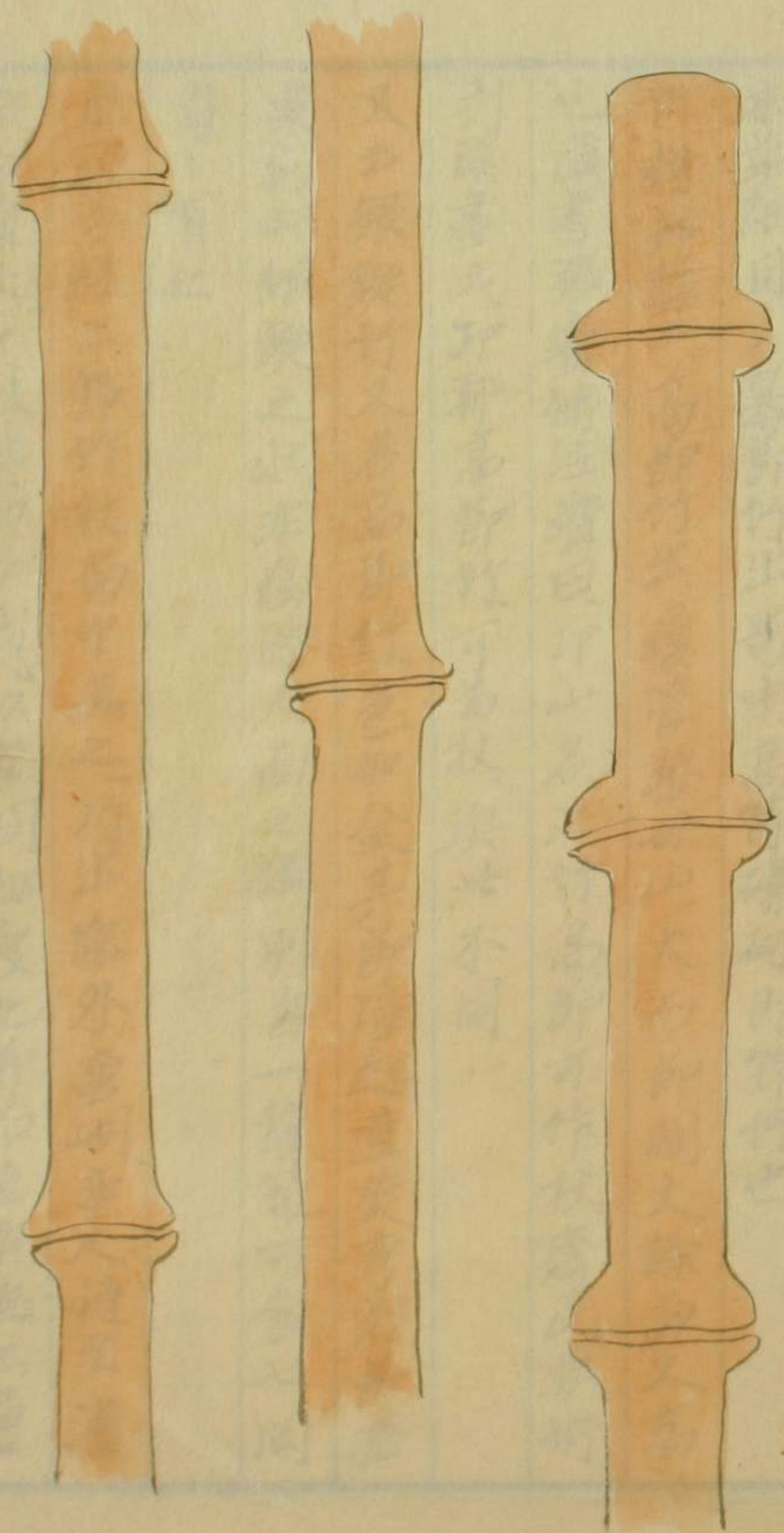
亦產蘇邦一曰扶老名美髯同

又云節竹高節實中狀若人刺者杖之極廣志云出南廣邛
都縣然則邛是地名猶高粱蓋張審傳云於大夏見之出身
毒國如感邛杖然開越島越島則古身毒也生尋伏山去洞
庭西北一千一百二十里黃岡云華林國有扶老三株如此
則非一處賦者石得身者蜀地之生也禮記云五十杖於家
六十杖於鄉者扶老之器也此竹美既固杖又名扶老故曰
名美髯同也

齊民要術云邛都高節竹可為杖所謂邛竹

羅浮山記云邛竹本出邛山張審西至大夏所見也而此山

多紀氏所藏高節竹之圖



左右時有之，鄰老以為杖。

本草綱目云：暴節竹出蜀中，高節礫礪，即節竹也。

竹譜詳錄云：高節竹出瓊管黎母山，大而節闊丈餘，節又高也。漢書張審傳注攷曰：卬山名，此竹高節可作杖。齊民要術引漢書云：卬都高節竹可為杖，與此不同。

又云：銀鏡竹又名高節竹，色如金，其節隆起，莖旋彎削，節密，覆宛如銀鏡之狀，非籬滕人面之類，別若一種，筍可食。七因圖：有之。

廣群芳譜云：節竹杖蜀中無之，乃出徼外蠻峒，蠻人持至瀘叙，間賣之，一枝然四五錢，以堅明細瘦九節而直者為上品。

秘傳花鏡云漢武帝遣人問群類致印竹杖

四川總志云印竹出印州之印嶮山即古臨邛地也漢張騫
奉使西域得高節竹還而植此今人取以為杖鶴膝者佳又
叙州亦出此竹雅州復有一種名羅漢竹皆為杖之具

釋名

二ふたけ 俗名

高節竹 漢書竹譜詳錄

此竹每節極めり高一故小名つく

筍竹 本草綱目

漢書張騫傳注云印山名此竹高節可作杖之器人三九

よよんをて印と筍小作とて以て高節竹の一名とせし也

高節竹 全上

高節ハ即ち高節の義なる也

銀筍竹 竹譜詳錄

四方竹

四方竹一名四角竹ハ漢名と方竹一名刺竹といふ今江

戸所ハ小こねあをといつともいふ肥後国の産也

と冊州本草綱目のひまた琉球本草綱目より来るものなり

いつさいらあは江戸小あやとのハ其高さ八九尺より

一丈許りなり毎節相去ること三四寸ありて何れ

節間も上より下へ細澁砂ありて砂紙と摩する如
しまた地上より一二節の周圍に細小根つらるるを
してそれより以上は每節より細小根とるものきと
の皆突起して頗る黍粟の類とるらるるもの非く粒
まをらふ付てその先或は只かをたれども其こころ
より切て二三節とこめり地中の挿おくる或は自ら
黍粟状のこころきとの延び出て遂に細小根とるこ
ころも五月の比の梅雨過ぎるを降つてきぬ時小
らるるを大方に根つきぬかたの多きを此枝の根上
十二三節よりとりぬり獨枝と生くもの多きを双枝三枝

こころを梢上より至るこころ新竹の形状なり年を経る時
ハ其枝節より包まると二節三節と抽出て五枝六枝或ハ七
八九枝とも叢生とるの葉の状生竹に似て極めて細く
長さ五寸餘廣さ五分許りして葉先最細夫を新枝ハ
四葉三葉と一葉二葉と旧枝ハ五葉六葉或ハ七葉と一葉
と二葉との葉先より至るとハ皆二葉對生して正木穂子
の葉先の如し此葉秋末より生し冬より至ると成長を其
稔まつて葉色やむ小斑矣の色を愛さず味亦よし
丹州國竹云方竹ハ肥後ノ産ナリ今ハ東武所ニニアリ
大ナルモノ一握許竹林勝久ニニテ肥大ニ至レハ徑二

寸餘ニ至ルモノ稱ニアリ又徑三寸餘ナルヲ花尊ニ作
レルヲ徑年親ニシテ目撃セリ潔マリテ美觀ナリコレ
産ナルハニ普通ニナルモノトハ迥ニ異ナリ鋸折ノ處
方形ナリ今書画ニ造レル方竹アリコレハ嫩條ノ十キ
四角ナル銅線ヲハオテ造作ナルモノト云自然ノモノ
ニ非ス

本草綱目啓蒙云方竹ハ琉産ナレ氏今ハ諸國ニ裁ルモ
ノ多シ後七八分形四稜ニシテ銳ナラス全身ニ沙アリ
根上ノ三寸許四圍ニ小根通リ出テ刺ノ如シ故ニ断テ
玉杆稱シテ活シ昂シ用テ杖トス唐山ニハ大竹ニモ方

ナル者アリ通雅ニ方竹出君山周漸魯同以方竹獻取其
四稜廉蓋部方物記贊方竹中矣但小耳此未見北戸錄澄
州之大方竹也ト云

本草綱目云有方竹出川蜀其節或暴或無或促或疎
北戸錄云澄州産方竹體如削成勁挺堪當杖亦不讓張審
節竹杖也其蘭州亦出大者數丈

筍譜云南方有方竹今澄州潯州鐵石多竹内實微通心若
叙股許筍可食亦美湘川人取竹作床椅有四稜上穿孔入
當耳

竹譜詳錄云方竹兩浙江廣慶有之枝葉与苦竹相同但

節莖方正如益母草狀深杖出筍經成竹高者二丈許無甚
大者為柱杖最佳番禺志云竹方而實心編織不及他竹止
以方為異矣武陵同經方竹出枕源山四方而不能其材中
杖會稽續志云方竹中堅而外方王峯山所植贊寧云澄州
辰山方竹其方二寸出天台玉霄峯者最妙或云人家忌種
者不祥筍亦不中食常德節推聽植之韓魏公竹

桂苑叢書云大尉朱崖公函出鎮于浙右前任罷且遊耳露
未因訪別于老僧院公曰弟子奉詔西行祇別和尚老僧者
熟于祇播至干談話多空教所長甚對以他事由是公憐而
敬之莫若既然將欲辭去公曰昔有客遺杖一節聊與師

贈別亟令取之復更而至其杖雖竹而方所持向上即眼鬚
牙四面對出天生可愛且朱崖所寶之物即可知也別後不
數歲再領朱方岳三日復因到院問前時杖何在曰至今
寶之公請出觀之則老僧規圓而漆之矣公嗟嘆再語曰自
此不復目其僧矣大尉多蓄古遠之物云是大宛國人所遺
竹唯此一莖而方者也

陳千陸意見云余嘗與人論造化所生之物自然而成者如
昂美雜卵之類多是圓方者山石間成方體亦非僅有
方竹一種亦非四方可見造化以圓為貴而無方截廉隅老
子曲則全之說非欺我也直方之道人所以裁成天道者亦

不可過甚

益部方物畧記云竹筒皆圓，此獨方形，倍於籜，細節較。考樂錄事云有方竹，上生九節，其崇不滿七尺，有梓竹，合竹之字，竹俱可作杖，有三代時立鳩飛鳩杖頭，周身金銀填嵌，用以飾杖，上髹二三寸，長小萌蘆，小靈芝，及五藏圖卷，暮年鳩之，據奇歷怪，多有相長之益，若萬歲藤，黎藿為杖，形雖奇怪，此為老衲行具，恐非山人家扶老也，姑置弗取。

明宋學士文集云，皇帝視朝之暇，燕殿武樓中，每召一二臣，鄰，諮詢治道，時吏部尚書臣參同在帝左右，歷談古帝事，旁稽物理，四偶及於竹，帝曰：竹之類，具亦多乎？臣同對曰：其類

實繁，晉戴凱之所譜，至五十餘種，或根如盤，輒或節如束針，或細則勝簫，或鉅可為舟，有未能歷舉者，大概其色皆青，其體皆圓也。唯吳越山中有名方竹者，最為詭異，四稜直上，弗偏弗頗，若有廉隅，不可犯之色，以故士大夫夢之，往來宋而為筍，節，帝曰：信有諸乎？臣同復對曰：老臣焉敢謬言，既退，獲一枝以獻，帝摩挲觀之，悅曰：臣同具亦信人哉！於是親所翰墨，草方竹記一通。

留青日札云：怪竹見唐畫，不知今為何竹，名甚奇。高宗遣官者，弟怪竹，江南將蔣工苑，荊州長史蘇良嗣因之。今上亦曾遣使采江南竹，即此類也。方竹寧波志云：葛仙翁煉丹，于定

海靈峰植竹節化爲竹而方

攬菴微言云李文饒鎮潤州日與甘露寺僧善瀕行以方竹杖餉之是公所寶及再鎮問僧前竹杖無恙否已規圓而漆之矣公嗟惋弥日嗚呼一竹杖也知者以爲珍不知者則尋常視之矣世間萬物皆如此不足論古人所謂身外皆長物也以有道者觀之奚啻如山僧之視竹杖已乎庸知此僧非爲文饒說法也續說郭引

致富全書云方竹本方可徑寸而長似紫竹種出天台近有移至吳中亦活

秘傳花鏡云方竹產於澄州桃源杭州今江南俱有體方有

如削成而勁挺堪爲拄杖亦異品也

本草彙言云方竹形方葛仙植于定海靈峰者見寧波府志又方竹體如削成勁挺堪爲杖產澄州見北戶錄又益部方物誌有方竹贊又澄州西游別錄名居山產方竹又臨州亦出方竹長者數丈

格古要論云方竹出西蜀浙江杭州府西湖飛來峯山上亦有之其竹節上有刺蜀人謂之刺竹

養餘月令云方竹澄州產洞庭亦有之體如削成勁挺可堪爲杖亦不讓張蓋第竹杖也桃源山中亦有但節脩雜首不堪斬削耳寧波志云葛仙翁煉丹於定海靈峰植竹斲因化

方竹

邵武府志云方竹其枝葉皆如常竹，但其幹稍方，為異，可
為杖筍亦美

武夷山志云方竹其形方正如削，每曲皆有，秋間生笋肉脆
而味美

丹徒縣志云甘露寺一僧道行孤高，李贊皇廉問，日華與之
遊，及罷，任以方竹杖一枝，留贈焉。方竹出大宛國，堅美而正
方，節眼鬚牙，四面對生，實濟公所寶也。及再鎮浙右，其僧尚
在，公問曰：所奉竹杖無恙否？對曰：規圓而漆之矣。公嗟惋，弥

日

所寶也之笑
之字恐寶







高要縣志云方竹今寺觀及別業中多植之質薄易折

嘉興府志云方竹具體方而色白十月生筴異種不多得

石桂苑叢筴以下の引書ハ庶物類纂ニ引くニコトナ

リ

釋名

四方竹

丹州同竹本草綱目啓蒙

四角竹

本草綱目啓蒙

方竹

北戸錄筍譜竹譜詳錄本草綱目

刺竹

括古要論

正誤

通雅云方竹出君山云、益部方物記贊方竹中実但小耳、
北未見、北戸録澄州之大方竹也

播小澄州まき小陽州の作る一益一傳写の藝なり
今北戸録の文と詳しき方竹澄州生方竹體如削成堪
出杖云、陽州亦出大者數丈こんえたり之ふりぬ
澄州は産まらぬ尋常の方竹にして大なるものハ陽
州より出たり然ると本草詩詠のまき通雅の文
と列て其字を改めたりとのハ疎漏の至なり

實竹

実竹一名実中竹一名実心竹ハ和漢通名として舊くを陰

奥國松前の竹島本草綱目及阿波國一字山本草綱目産す

々とのその名殊々高し今江戸本草綱目ハ此種あり事と知ら

る好むつまた其枝葉と見たりつと本草綱目李息齋竹譜に

實竹一又淨瓶竹の如しと見えたりとの枝葉ハ蓋し

布袋竹と大抵一様のものなりつと本草綱目陸奥國松島に

産すとの河を近頃大窪村太郎和名の人名と天民

江山和名との地ハ遊歴して二竿と携来すとの杖とせしと

見ると一竿ハ長さ四尺餘徑五分許なり毎節またけ

ふり高くしてその間相去る事三寸なりとの杖と

生るるがこハ溝渠のまき常竹と名と至て深くと下

節上より下小至る一竿ハ長さ五尺許りてその節間六
七寸或ハ八寸計りたるもの多しや、太しりの毛も根より
近き所の二三節ハ常竹と同しくその節間つまをて短
しその根の切口ハ共ハ充実して心かゝるいゝものと稍
上のまを口小至りてハ鍼と穿つゝき程の細小竅あり
まゝ小野蘭山の見たるもの徑り一寸餘のものありて節
未せしハ徑り二三寸のものありてこ
本草綱目ハ小栗竹
瑞仙院の抄原氏より贈りしものもまゝ蘭山の見
しと同しくその徑一寸許のもの多しと別ハ図せし
ハ長さ五寸許の竹よりや、細しものもこれ一物なり

また西土のハ実竹ハ文彩斑駁なるものありて至て大
かりハ梁柱或ハ瓦おもちりしきものありてまた満心竹
服傷竹と竹譜いへるものありてこれハ蓋し実竹の出地
よりなると方言の異なりとのありしものありしや
本草綱目云實中竹、松前竹島生之、串海參以寄遠者是
本草綱目啓蒙云実中竹ハ即弘景ノ説ノ実中竹ナリ阿
州一字山ニ産ス徑寸餘節末ノ品ハ二三寸ノ徑ナルニ
ノアリ本草綱目ニ文彩斑駁可為器物
丹州四竹云此竹戊子ノ暮春抄原氏ヨリ得タリ根ニ近
キ所ハ實シテ心ナシニ二尺許リ上ハ細坑アルヘシ尋常

一般ノ竹ニ比スレハ微扁ニシテ中心充實ニシテ重シ
溝深キモノ也

又云實心竹畧シテ只實竹ト云心ニ空孔ナシタマハ
孔アレハ針竅ノ如シ本草綱目啓蒙云實心竹ハ即芘景
ノ實中竹ナリ云ニ意フニ芘景ト云ハ人工ニテ芘ヲ作
為スルモノ多シ天竺ノ語文ニ非ス

集注本草云竹類甚多入藥用莖竹云々又有實中竹莖竹
並以筍為佳干藥無用 證類本草引

本草綱目云竹惟江河之南甚多小曰篠大曰簫其中皆虛
而有實心竹出滇廣其外皆圓云々

竹譜詳錄云實竹枝葉節莖出處一如淨瓶竹但無腹項心
不虛空枝差少今人好斷取作馬筍幹甚堅韌

按小淨瓶竹ハ竹譜ニ江浙閩廣俱有之枝葉与淡竹不
異但去地一二節便擁腫有項有腹宛如一瓶以上幹節
仍如常竹其節極堅人取為拄杖と云云竹はさくさく
是布袋竹の一種なり

又云滿心竹生廣陽朔山中枝葉一如葉竹但幹實無心故
名湖湘之間亦有之筍味佳雲南記云雲南有實心竹又宋
班駮可為器用唐褚清有實心竹詩葉是或即滿心竹是也
又云服傷竹江南諸郡徃々有之大者五六寸圓長二丈許

其中實四月以後出筍味甚美。枝葉自他竹亦類。服傷之義未聞。實寧白大者五六寸、圍長二丈、中實、古人用以削弩箭。四月筍美。

案庶物類彙引本草蒙言云、服傷竹大者五六寸、其中實、涵按案是亦實竹也

雲南記云、雲南有實心竹、文彩斑駁殊好、可為器物、其土以出第幹文林天中記引

案竹譜詳錄引文作胡

南志八郡志云、冀洽縣有大竹、數圍、實中、任屋梁柱、覆用之、則當瓦、閩越類函引

丹州園竹所載實心竹之圖

此即杉原氏ヨリ所得ノモノ也





大窪天民藏松島所産實竹杖之圖

又此圖と載よその上文上小本草書家と引き、此種ハ
蓋一河波目の産なりと云々



建昌縣志云實竹節長幹小厚肉微竅可作鞭筆笋味为佳

南昌府志云實竹四月初有筍

江西通志云實竹可筆四月始有笋

八閩通志云實竹可剖為器用

釋名

實竹

竹譜詳錄建昌縣志江西通志八閩通志

實中竹

集注本草

實心竹

本草綱目雲南志

滿心竹

竹譜詳錄

服傷竹

竹譜詳錄本草綱目



心誤

本草綱目云實心竹其外皆圓

案上實心竹ハこれと他の竹ハ比せりハその溝渠至
て深きもの多ク凡他竹の溝渠ありとのハ大抵一節
の間半をわけて盡るものなり也此竹ハ下節上節
了上節下節のたゞりきりとの溝渠の深き一様なりハ
これとの天性を知るに綱目ハ其外皆圓といふ
ハ蓋し偽臣の謬なりん乎

ぬたまた竹

ぬたまた竹ハ漢名と双指竹一名合紐竹一名天親竹一

名雙竹一名解竹といふ此種ハ古より所々の竹林中ハ
たゞく生出るものなりありてまゝ瑞竹の名あり其
状本ハ一幹ありて赤ハ兩幹に分るゝものなり凡西土
よの種この竹ありて筵竹蓋竹筋竹等ありまゝに兩幹ハ
りありゝものありとつゝもと本邦のハ漢書二竹の
かふりハ事ときりけまゝに拮竹一名雙竹あり此種ハ始
め筍と生る時より兩を相對して既ハ竹となりとて
根拮ハ一ツなりとのありと見えたり又雙指竹の兩幹
よりありゝものハその根上より僅ハ一尺許の所より
分るゝものあり或ハ十節以上より十尺許の所より

分りてはのち原是變生ものなるを以てたゞ兩幹の
りありとのちちりて三幹四幹に分りてありしを
八九幹にして十八幹に分りてありしを此數種のもの
のハさうし別名なりしものも其統名と瑞竹といふ
りし群芳譜長沙府志及ハ湖廣總志に見えたり
和漢三才圖會云雙岐竹揚州天王寺有之漢竹之二岐者
處之亦希有

大和本草云扶竹ハ雙竹對生ハ王子敬カ竹譜ニ出タリ
其筍ヲ合翻ト云日本ニモ往々有之種那代醉載之
本草一家言云有扶竹又名天觀竹即雙生竹

筍譜云雙相竹筍出九疑山第二重麓臺側筍長獨莖及生
枝葉即分爲兩相葉密而細亦謂爲合翻竹與衆扶桑者少
同

案竹譜詳錄引無亦謂以下十三字湖廣總志引正與此
同又案象扶桑者即指扶竹而言也

又云扶竹筍今出武林山西旧謂雙竹院中所在備篁嫩篠
皆對抽並亂相倚云茲竹自永春己未有之馮湖叢譜爲其
記王子敬竹譜云合翻竹錢唐扶竹蓋此雙竹即扶竹也
譬猶東方之產桑兩々並生謂之扶桑矣今詳是竹爲筍便
有合翻貌並出愚嘗著扶竹賦

案竹譜詳錄引並生間有枝物二字

傳家集云本草類同而種殊者竹為多杭州廣嚴寺有雙竹
相比而生峯林皆然其尤異生古樹腹中自其頂出森然殊
樹如龍蛇相索矯首研然

近時男右燕齋の庭砌より年為るに枯松の腹中より其
梢を貫き出たりたり多し竹ハ細き法竹ハ
てその状頗る廣嚴寺中より包て尤異といふ小略
合のものなり

竹譜詳錄云扶竹出武岳山中与他竹無異但生節時皆對
抽並亂有合節之意山海經注久以扶竹為竹未詳

又云駢竹一椹數節之上分為兩竿各生枝葉別無種類特
常竹之變插連理木並蒂蓮之屬故亦罕有揚州莫大易招
封家一株然可數尺玉泉山樸翁和尚贈予一椹杖甚妙後
轉贈康廷臣都運今姑蘇東季博提峯家園昭老堂有一株
高五尺餘呂端明中亦有一株是薑竹之駢生者高約七八
尺圓下屈折作葫蘆形枝葉首細可愛予官嘉禾洛園而得
一株兩節之上分為三幹枝葉數葉是筍竹之變者尤奇特
五雜俎云天親竹武夷城高嚴寺後有竹本出土尺許分為兩
岐直上此亦從來未見之種案宋史五行志天禧間太平興
國寺亦有此而大中祥符間黃州江陵武岡晉原諸處且以

祥瑞稱賀矣

本草彙言云天親竹未嘗兩歧出浙中

又云雙梢竹又名合翻竹初生枝葉即分兩梢出九疑山

又云相思竹對抽並亂出蜀涪州

華夷花木考云秦雜言雙竹自是一種有成林者因出三枝
枝兩歧後河浙人云此竹親竹有時出一番雙筍故例皆分
歧亦非年之有之

清異錄云天親竹分歧竹也

輟耕錄云廷玉先生號涇溪錢唐人家多竹思一竿上歧
者二人皆異之賦雙竹杖詩未幾許先生歿先生有二子或

以為先兆云

瑯琊代醉編云武林山西旧有雙竹院中所產修篁嫩篠皆
對抽並亂微王子敬竹譜所謂扶竹譬猶海上之桑西之相
比謂之扶桑也扶竹之等名曰合歡棠律書注伶倫取嶰谷
之竹陽律六取雄竹吹之崑呂六取雌竹吹之

必物類纂云謹案丹鉛總錄文同事言要玄微作亂

揚升菴文集云蜀涪州有相思崖昔有童子卅女相親交贈
今竹有枕欵之形等亦有柔麗之異崖名相思崖竹曰相思
竹孟郊詩云竹嶸峭籬曉煙指此竹也

農政全書云相思竹出廣東西之生等

留青日札云武林西山舊有香竹院名曰扶竹其筍名合歡
筍即四川涪州相思崖桃釵竹一名相思竹也

長壽縣志云相思崖在黃草峽上崖產相思竹、連理若桃
釵之形今絕種矣見益州記及涪州志

秘傳花鏡云雙竹生浙之武林西山其妙在脩篁嫩篠對抽
並亂色最可愛

又云相思竹出自廣東似雙竹而差大皆兩々相對而生

廣群芳譜云宋史五行志太平興國八年十月乙酉蜀州獻
瑞竹一本十六節上分兩歧

又云淳化二年二月射洪縣安國寺竹二莖同本六月歸州

竹連理

又云大中祥符八年四月開元寺桃竹一莖上分十八節皆
相對

彙苑詳注云東陽劉道德家筋竹林思生連理

華原縣志云萬曆丁未春瑞竹生于玉川溪龍山一本自十
節以上分為兩歧節々相偶直上枝葉茂盛

湖廣總志云大中祥符元年八月黃州獻一本雙莖竹

又云大中祥符六年武岡民園產異竹、生兩株同一本上
生四莖

長沙府志云寧宗慶元庚申寧化縣治產瑞竹一根三幹

空慶府志云宋祥符九年武岡何文化園竹生兩株同本上
肆莖

浦仁縣志云祝氏祖塋孤竹三四節已上再分兩歧而後梢
亦復生千倪氏園五曆癸卯又生千張元愷園

南昌府志云竟城三佛寺產竹一本而二幹

高安縣志云成化二年修仁園黃敏堅園產竹一本兩枝

九江府志云宋祥符四年四月瑞昌縣民李讓家篁竹去地
五尺許分爲二莖知州范應辰以聞

西湖遊覽志錄云宋時楊德溫居崇新門外挿枯竹以引薜
荔月餘枯竹復生頃之其毒溺水死明年園竹忽發兩歧扶

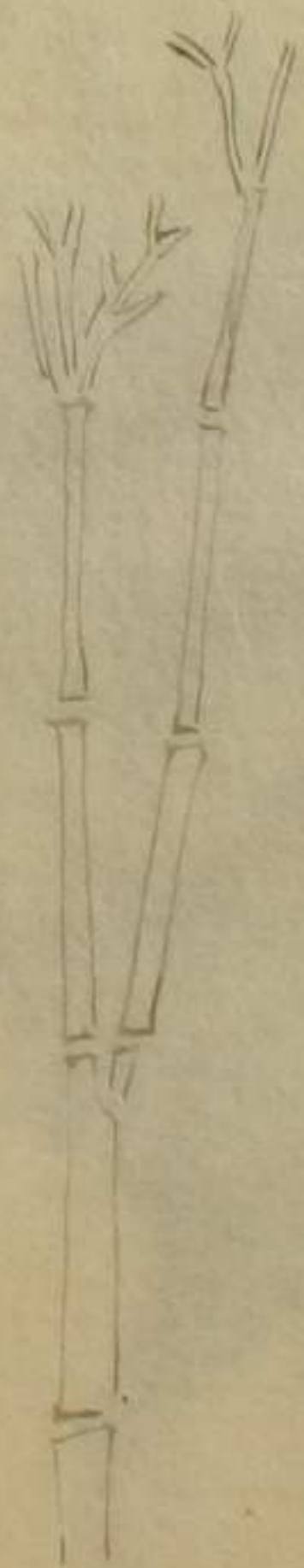
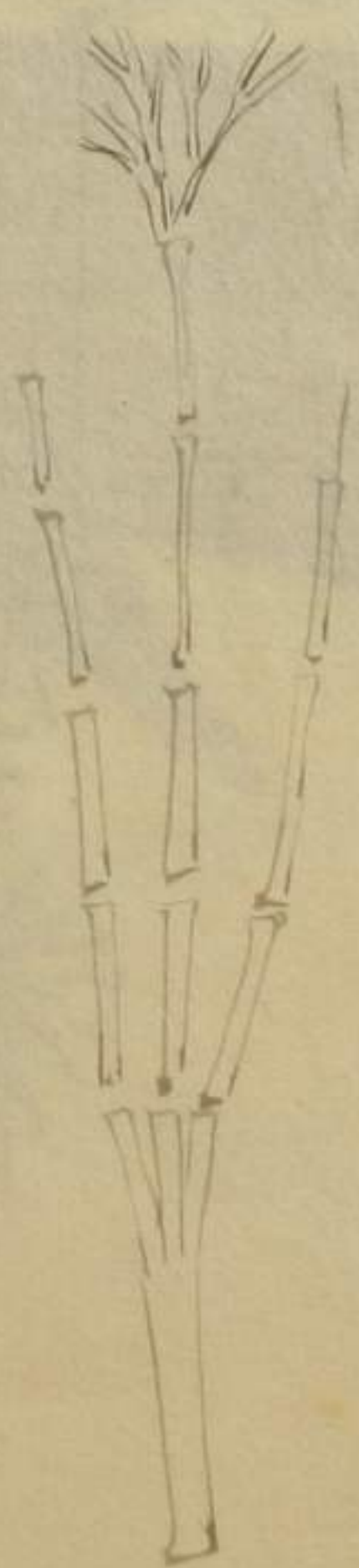




疏可愛未幾其妹死元時白廷王家竹亦兩岐其年廷玉死
乃知反常之物皆非吉兆也

義烏縣志云正統間花溪提瑞竹三竿虞氏園竹三幹一本
時有三婦幼年孀居守節八十餘然以類應

菽園雜記摘抄云嘗記正統十年予家祖園新竹二本皆自
敬節以上分兩岐文翠可愛家僕傷其危斫而芟去蜀枝用
以又取蘆草飼植景泰二年新居後園黃瓜一蔓生五條結
蒂與脫花藤分張為五瓜之背則相連附園丁採入象玩一
過兒童嚼而食之滋味干朝有以瑞竹瑞瓜圖求顯詠者閱
之則皆予家所嘗有也况他竹之瑞一本予家並生二本他



瓜僅二三又非達理予家五瓜達理不瓜瑞字使當時長老
兄有造言喜華者諂諛歸之誇覽歸之象慶勤象傷財其尚
不靖多矣惟其潤幅無葉故人之所謂祥瑞一切不知動其
心惟不知動其心故聽侈不形而災害不作可以保其家於
悠久也倚曰天下本無事庸人自擾之其斯之謂歟

釋名

めたまた竹

和漢三才圖會不知
本草一第言

雙梢竹

竹譜詳錄
本草一第言

合翻竹

竹譜詳錄
永州府志

案又竹譜又云合翻竹筍出南嶽諸州山溪間郴州最多

其筍初生合翻形勢及成竹也或三莖合或兩莖合斷其
間有竅竹皮或斑矣文僧漸作針筒用也ここれ真の合
翻竹なり此云合翻竹ここれ同名異物なり

天親竹

五雜俎
清異錄
本草一第言

案又双梢竹ハ古名カシマ天親竹ハ落世の名ナリ故
ここの名古きらの小見えに

雙竹

傳家集

駢竹

竹譜詳錄

案又説文之駢如馬二馬也从馬并聲と云く然るここ馬の
原聲本義なり

扶竹音讀 羣芳譜

此即雙梢竹之同名異物なる

相思竹揚升菴文集 詩經類考

桃斂竹留青日札

雙竹音讀 柳邨代辭編

此即真の雙竹也天親竹まゝ雙竹之名つく正は是に同名異物なる

正誤

庶物類纂の齊民要術と引て山海經云龜山多扶竹

案は扶ハハハ扶の壞字なり即筍竹とすハ然るを庶

物類纂扶竹の條に此文と引ハ誤りなりこれハ廣
群芳譜の筍竹山海經謂之扶竹郭璞注謂之扶老竹案
簡譜云此與扶竹並節者不同といハる説ありて
のりりゆりれとも佩文齋もとの實ハ扶の扶の壞字
ありてこことあらざるふらまを其のつひにやを滋せ
に至りてハかゝるたらのものを物の異名の出来事
本草中殊ハ多し

大知本草云扶竹フタコタケ云々

案ハ扶竹ハ雙竹かしてふたまた竹あり然るを
萬信のかくつハるものハふたまた竹ハ又雙竹の

名のつふふを漫不混同して一物にせしむる

柳柳代時編云扶竹之笋名曰合歡

葉の筍譜云扶竹云：今詳是竹首筍便有合歡貌並出
こ見えたる、然ると張鼎思及び王蓋臣の輩並ふ此方
と誤讀して直よ合歡と以て扶竹筍の名にせしハ蓋
し強名なるを

左右枝竹

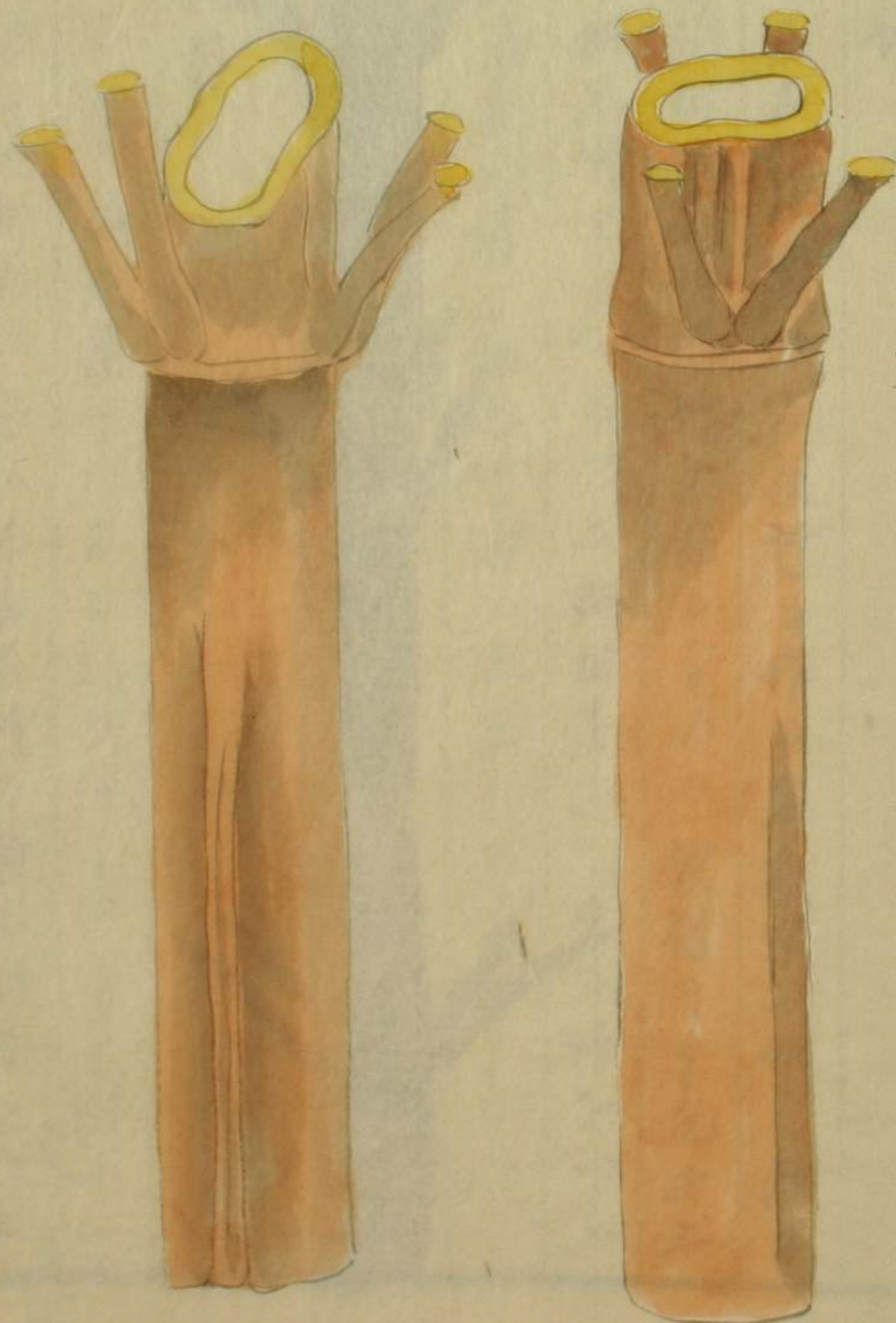
さうし竹ハ世よまれなる竹にして大き僅小一握許の過
また一節の左右ふかのく双枝と對生せしハ頗る二竹
と合せて一幹にせし如し故小との四所もまゝ左右

よ相對して下節上より上節下よりなるとの四所左右
小相對よりふふをそのつら竹身田扁にして縦の
徑一寸七分横の徑九分許り今一節ハその雙枝前後
よ相對よりを以て四所もまゝ從ひて前後よ相對より
ハその竹身の田扁なる状まゝ前後間ハ相及せし其
節隆起してや、苦竹の類也といふともその全形を
熟視をくらきハ蓋し漆竹の變生なるこの程ハ榊原伊
右衛門の舊くを載せしものあり其長僅小八九寸は過
りまゝ舟州岡竹小載せしハ此竹よりとも細小にして徑
六分許のものがあまた先年深井の種樹家より生

竹ハ高さ一丈五六尺にして地上より十二三節を経て
 此より以上ハ每節左右前後互ハみ枝と生ずるに
 前種と一様にして其梢小至るとハ常竹に同しこの
 種もまた淡竹の變生せしめてその形は近き竹林中
 にもうろくうゑしものなるにその節はさうく廣群若諸小
 瑞竹一本十六節上分兩枝にわかれ上高勝志は黄敏堅圍
 産竹一本兩枝にわかれこれ一物のやうなれども其
 善小兩枝にわかれ即兩莖のこゝろをこれと別
 種とす

釋名

神原猪右衛門所藏左右枝竹之圖





左右枝竹 俗名

葉は左右枝竹或は双枝竹より作る名義字の如し然る
 と舟州園竹は相思竹より作るものハ假借字を凡西土
 とも相思竹といへるハ二幹相並ひて生る竹といふ
 故に農政全書は相思竹両々生る竹といふ
 俗に云々の如く左右枝竹より作るかこ却て其意を得
 たりといふ可也

継竹

継竹ハ今所々の人家に於て此の如く其の竹を別ふ一
 種の如くありて其の竹を以てて其の五

幹と切去るときハ此の梢上よおの毛と數十細枝と雜出
し竿とふれを繁葉細密にしてその状頗る鉢のこころ
予嘗て番所辺と行し小雜中りの厚敷のこころこころ其
鉢の大きさ徑三尺許のころと見たり今猶ありや否と知
らぬ

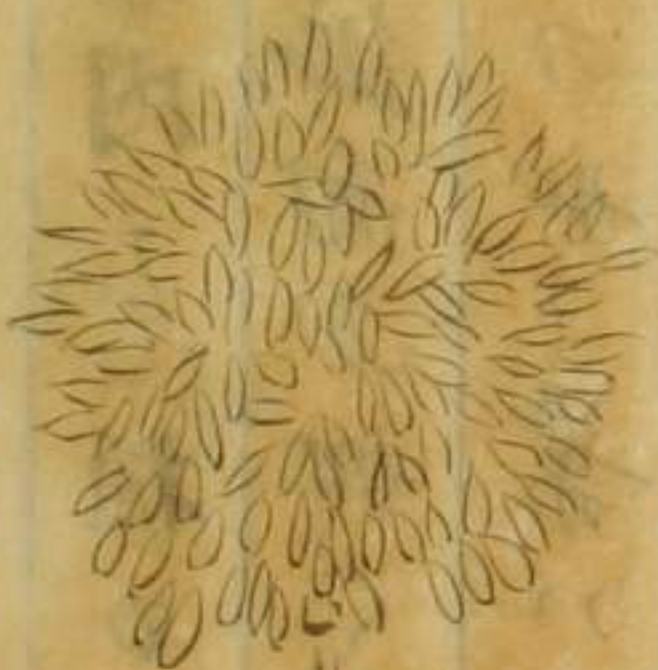
和漢三才圖會云本綱百葉竹一枝百葉云々案一枝百葉
竹不知有也否今荊下枝葉及中心稍頂上遺枝葉則葉甚
盛茂如一枝百葉作成者也

竹譜詳錄云鉢竹每千杭州街市人家見之植盆檻中高不
過一二尺下獨竿上叢密別無種類人力爲之以筍初解籜

折去上梢則竿抄雜出小枝無數三三寸後枝葉轉密盤葉
團々如毬之狀繁細可愛故名

Blank page with vertical blue lines for writing.

竹譜詳錄所載鉢竹之圖



Blank page with vertical blue lines for writing, containing faint bleed-through text from the reverse side.

釋名

隸竹 竹譜詳錄

名義上文より見えた

羅漢杖竹

羅漢杖竹ハ今同藩内より植る者あり其高凡七八尺にして毎節擁腫或ハ佛面の如く或ハ鶴膝の如く其屈曲恰も龍の如く又蛇の如く葉ハ苦竹の如く一様にして葉ハ褐色あり此即苦竹の變生なり別種ありあり

竹譜詳錄云羅漢杖竹生韶州府即古梁州也東有梁黎山中産此竹屈曲如龍蛇之狀





竹譜詳錄所載羅漢竹之圖



釋名

羅漢杖竹 竹譜詳錄

此竹形狀常小異。と以て羅漢杖竹三名つく

南京竹 慈竹

南京竹ハ俗稱竹ノ漢名と慈竹一名義竹一名孝竹一名
 叢竹といひのまゝ一名子母竹一名兄弟竹一名慈孝竹一
 名慈姥竹一名孝順竹一名玉祥竹一名釣絲竹一名紫雲
 蓋といひふこれ即鳳尾竹の別種なり故小其枝幹並ニ
 鳳尾竹ニ似て每葉鳳尾竹より長しとの高きとのハ
 二丈許 竹譜 低きとのハ六七尺 本草綱目 叢生數十百竿ニ

至り根窠盤結して他處より其竹類との筍一竿小兩出
し夏筍ハ中より発して涼と母竹に譲り冬筍ハ外より
発して母竹の寒と護る致旨全書 遵生八牋いひまゝ敷種あり
其節間相去る二三八九寸と籠竹益部方 物略記いひ一尺許
ふりと苦竹上いひ相弱くして地よりたゞと釣絲竹
と上いふ叔江都より舊より義竹といへりハ多摩川の
こぼれたる新田社の境内ふりたるもの枝葉並に尋常の
苦竹と一様なりとつとつととの筍葉外に発せりこと
ふりこれハ延福以南有竹長刺雲慈竹類也潤部い
るふりとの趣相似たりとつとつと此筍の葉外に発せさ

るの植しより數百年とへて皆人常ふ其地と往來して
其地至堅るを以ての故なりと或人いひとさるる
此義竹ハ慈竹類いあらさるる也
庶物類纂云慈竹俗名奈莫ナモ氣莫キモ他許ト山山嶽
大和本草云慈竹本草曰一名義竹叢生不散人裁為玩今
葉是近年所來唐竹欵或曰南京竹天寶遺事云有竹叢密
笋不出外因名義竹
本草一家言云孝順竹一名慈竹冬筍再生筍冬筍生外也
似護母竹夏筍抽裏面如清母竹故名
本草綱目啓蒙云慈竹ハ竹細リシテ高六七尺ニ過ス其

筍蕒外：出入

述異記云南中生子母竹今慈竹是也漢章帝三年子母竹
筍生白虎殿前時謂之孝竹群臣作孝竹頌太平御覽同

吳元天寶遺事云大液池岸有竹數十叢牙筍未嘗相離密
：如我也帝因与諸王闲步于竹間帝謂諸王曰人世父子
兄弟尚有離心離德此竹宗不相踈人有懷貳心生離間之
意者視此可以為鑑諸王皆唯之帝因呼為義竹

酉陽雜俎云慈竹夏月經雨滴汁下地生蕒似鹿角色曰食
之已痢

益部方物畧記云慈竹性叢產根不外引其密間不容筍等

生夏秋閱歲枝葉乃茂別有數種節間容八九寸者曰籠竹
一尺者曰苦竹弱稍垂地者曰釣絲竹或取節修層級者用
為葦笠

竹譜詳錄云慈竹兩浙江廣處：有之高者至二丈許叢生
一叢多至數十百竿根穿盤結不引他處四時出筍經歲如
成竹子孫齊榮前抱後引故得此名晉安海物記云義竹亦
曰兄弟竹秋叢生曰秋竹注云其筍叢生仿謂之兄弟竹筍
味不中食也新寧志云慈竹叢生不離母四時有筍如
釣竿一名四季竹今秋竹四季竹別見

農政全書云慈孝竹大叢長幹中聳群條外護向陽高臺種

茂

群芳譜高臺種茂
作別茂宜種高臺

致富全書云海錄紫雲蓋慈竹也其本叢生其色与形俱與他竹迥別冬夏俱出筍冬繞於母竹之外夏生於母竹之内人取其慈孝名義多植之種極易生

月令廣義云慈竹四時生筍其竹内实而節疎

月令通考云孝慈竹筍四月生江南人以灰煮食之其竹内

实節疎性弱可代藤形緊細

彙苑詳注云慈孝竹其筍一季兩出冬則外生夏則内生似有子母相顧之意故名

遵生八牋云抗產孝竹冬則筍外叢外以衛母冬夏則筍生

叢内以子母變其竹幹可作釣竿叢生可愛

物彙鏡原云慈竹秋笋高數丈尾甚柔細如釣絲又名釣絲

竹歷冬及春始展葉左右並列如鳥翎狀初歲極嫩土人破

者篋斜以爲麻可爲履号竹麻屨出叙州府

通雅云慈孝竹則叢竹四時筍

蘇州府志云慈老竹叢生俗名慈孝竹

松江府志云慈竹寒則顯生暑則隱生有母子相親之義鄉

聚家種

南昌府志云慈竹又名孝竹

紹興府志云慈竹冬月筍竹外繞其母故又名孝竹又名五

祥竹

揚州府志云慈竹僧贊寧等譜其竹肉實而節疎性弱可代藤形繁而細叢數竿竿不外迸然不堪食新黃間名叢竹近來揚州多植之忘戶

嘉興縣志云慈竹一名孝順竹又名桃子竹夏則莖生叢內冬則生具外故名

常熟縣志云細而叢生者名慈姥竹惟可供度砌之玩致道觀中

義烏縣志云慈竹即子母竹王勃賦如母子之鉤帶似圍門之隣友又名孝順竹即義竹冬筍出于外夏筍出于內李白

有慈姥竹詩

當塗縣志云慈姥磯竹其竹圓嫩異常中蕭管及磯一名鼓吹山李善云慈姥山竹蕭管有聲以節疎而體圓也今亦少竹

浦城縣志云孝順竹叢生新笋始披皆環衛其母

平湖縣志云慈竹一名桃絲竹

新城縣志云慈竹一名赤竹

會稽縣志云慈竹小而密土人多植之以當籬接冬月笋生竹外繞其母及人名孝竹一名王祥竹

閩部疏云延福以南有竹叢生涉冬抽萌慈竹類也而長刺

雲大者拱把，吳越慈竹迥出其下。

歷代賦彙

慈竹賦 有序

唐 闕名

案義烏縣志云王勃賦引之如母子之鞠帶似
閨門之擘友之引之文引之八閩通志云王勃
引之宗生族茂天長地久萬祇爭盤千株競糾の
文引之王勃の事明の

廣漢山石有竹名慈生必向內示不離本隋堽巨葉攢根苗
抵叢之大者或至百千株真而葉結踰乎咫步好事君子徒
為階庭之翫意吁嗟非此土所有乃有厭流俗之裁動鄉閭

之思者蓋推高節而興感覽佳名而思歸遂為賦

有竹將之生於高坡左連瑤帶右雜瓊枝恨幽客之方賞嗟
君侯之不知從蔚丹石遷榮綠池氣潔々而猶在色蒼蒼々
而未離屈巖壑之容貌充階庭之羽儀爾其割地分域解隍
抗趾疊幹籠回攢根風峙防碧落於霄末翳然光於夕始崇
柯振而烟靄生繁葉動而凡飈起擁涼砌之晨肅屏炎房之
晝澤至若白藏載謝玄英肇切塞北河聖江南地裂觀衆茂
之咸懷驗貞輝之獨潔抽勁綠以垂穎蓋同
類之常稟非殊方之異節若乃宗生族茂天長地久萬抵爭
盤千株競糾如母子之鞠帶似閨門之擘友恐孤秀而成危

每群居而自守何美名之屬而和氣之冥受嗟予道之存矣
物亦有之不背仁以貪地不減節以適時故其貞不自炫用
不見疑保夷險之無易晒榮枯之有期我遂轉於岷嶺遂萍
流於江汜分兄弟於兩鄉隔晨昏於萬里撫貞容而骨魄伏
嘉号而心死庶因感而長懷逆策情而勵已

唐 喬琳

維竹稱慈幾子有知九族敦叙孝友成儀是竹必滋五服相殘
肯肉攜離是竹必衰苟自家而刑國亦觸類而增思奉尊固
護檀欒柳比如束之捆如栝之密勁節中簪攢根內實聲唯
受風影不透日類宗族之親比同朋友之造膝至若暮歲窮

律霜凝雪霏陶鈞無發生之理松柏有滋凋之期是竹也叢
篁劈開芽筍怒長紫葍連披青筠紛上有偕老之情感饋親
之養如受制於籬且不旁侵於土壤雨露之澤謝爾象芳細
葉未吐貞心已長耻高標而迫出斯裏曲而不揚匪趨時於
律候寧隨韻於笙簧保無用而以道目將愧不才而與物俱
昌首成隍於隙地作盛昂之清涼重曰夫縣之凶缺兮知有
子母苞之鴻雁兮如以弟兄於家則既附潔侮於國則磐石
雄城田氏不分庭之荆陳家則應天之星莫不帶映掌據急
難鶴錫斯竹也共連根茹一本千莖年深轉密歲晚弥榮一
可以厚骨肉一可以敷友生於靈臺而莫非信性彰慈孝而

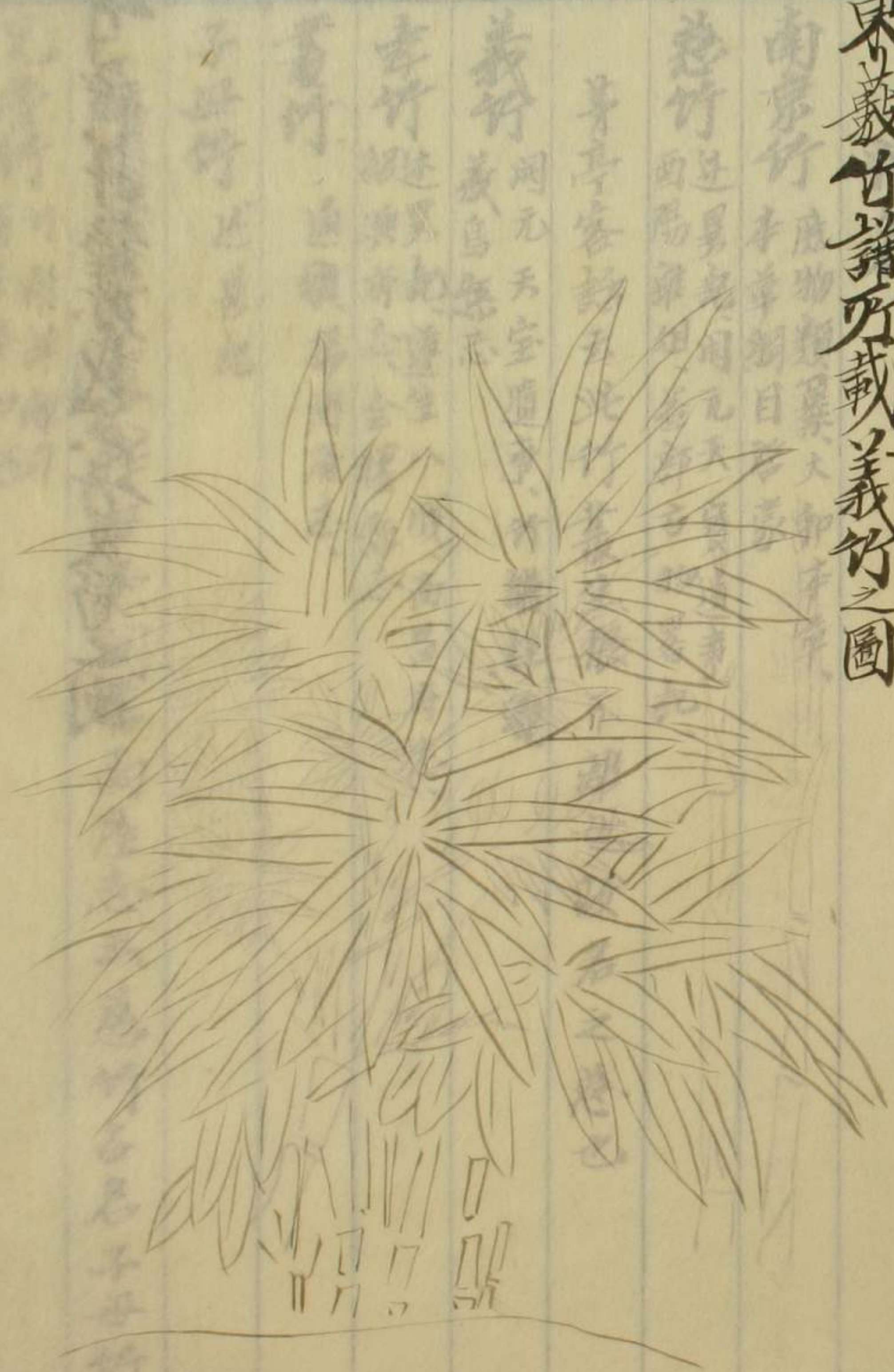
感通神靈

宋 蔡 襄

種植至多強名萬彙物拔其萃茲乃當天地之正氣有美竹
兮特稟天慈名而采被豈有懷於本根兮何千竿蔚然而環
侍若夫吳郡名園王家新第遠園斜橫橫塘靜水或薰風晝
未或秋露宵墜日遲留兮簷外陰移人憐惜兮屏間籟起方
且濯峭格而清琴足擅樂之生意或翻而琴者若堂有高羊
兮勃毒風而講議或垂而側者若家有令子兮聞語而而沈
思張如出門而事遠遊兮滋宿雨之清淚雍如奉庖而女眉
壽兮暮春烟而怡醉紫芳蟠聯馨兒季穉去者奔追迎者嬉

賦陳者若招並者如倚雖復貫乎狀於巧筆曾莫形其髣髴
借如秋晚霜重兮萬本稜々而僵悴陟榭盡兮塞月高堤楓
丹兮楚江紫此君也未盡田之苗玉刻炎州之稍翠國節屈
心兮雖大鈞不能棄其志於是捐三荆於堂下結蔓葛於河
漢馨氣同根之豆文驪承鸞之棣顧威鳳之時下亦孝鳥之
來寄設有用於律管天聲矣兮太和備觀此芳物悲哉遠人
昔我從軍兮南之海濱今我歸家兮西遊洛壑慨然於舊國
舊都感莊生之論恭止乎維桑與梓凱周傳之陳指白雲兮
天遠採幽蘭而露新嗟碧鮮之得地乃叢茹相親吾識爾德
豈止乎千計之涓萬石之封君者也

東穀竹譜所載義竹之圖



竹譜詳錄卷載慈竹及筍之圖

東坡竹譜以慈竹為圖



釋名

南京竹

唐物類彙大和本草
本草綱目啓蒙

慈竹

述異記周元天寶遺事
西陽雜俎益部方物畧記

茅亭客話云此竹叢生根不離母故名之慈也

義竹

開元天寶遺事竹譜詳錄
義烏縣志

孝竹

述異記遵生八牋南昌府志
紹興府志會稽縣志

叢竹

通雅揚州府志

子母竹

述異記

博間類纂子母作母子閩書南產志云慈竹古名子母竹

兄弟竹

竹譜詳錄引
晉書海物記

慈孝竹 幕政全書、月令通考、
棠苑詳注

慈先竹 常陸縣志、
富山縣志

孝順竹 嘉興縣志、
義烏縣志

王祥竹 紹興府志、
合稽縣志

王祥八人の名少く二十四孝の内の一なり

釣絲竹 益部方物畧記

名義上文引るところの指致鏡原よりなり

枕絲竹 嘉興縣志、
平湖縣志

枕、釣の倣借なり嘉興縣志より糸と子と作らまた

倣借なり

赤竹 新城縣志

紫雲蓋 致富全書、
引海録

龍竹 益部方物畧記

苦竹 同上

またけと同名

秋竹 竹譜詳録、
引海録

四季竹 竹譜詳録、
引新書志

心誤

棠苑詳注云慈孝竹其笋西出云：又曰叢竹夏月始笋不可食云：

庶物類纂云紫葉花詳注分慈竹嘉竹為二者誤也
太平府志云慈曉竹云：又云慈竹云：
庶物類纂云太平府志載慈竹慈曉之兩條者繫重出

桂園竹譜卷之四終

